



流民のアジア体験と「ふるさと」という「幻想」：  
森崎和江『からゆきさん』からみえるもの

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-05-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大畑, 凜 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00004816">https://doi.org/10.24729/00004816</a>

## 流民のアジア体験と「ふるさと」という「幻想」 ——森崎和江『からゆきさん』からみえるもの

大畑 凜<sup>1</sup>

### はじめに

1976年に発表された『からゆきさん』は、長らく九州は福岡を思索の拠点として活動してきた思想家で詩人の森崎和江（1927-）の代表作として認知されてきた。近代以降、日本から海を渡ってアジアの各地で娼婦として生きていった「からゆきさん」（以下、「」を省略）と呼ばれる女性たちの生の歷程を描いた本書はその後、1980年と2016年の二度にわたり文庫化されているが、ルポルタージュないしはノンフィクション作品としての性格だけではなく、当時の新聞資料や歴史資料などを丹念に読み解いた歴史書としての性格も持ち合わせている。とりわけ近代公娼制度研究においては、現在も先駆的な先行研究として参照されつづけている。

『からゆきさん』では、物語の縦軸として、森崎の友人である綾さんと、綾さんの養母でかつてからゆきさんであったおキミとのエピソードが断片的に綴られる。おキミはからゆきさんであった過去のトラウマに苦しめられており、時に「狂気」と化した言動で綾さんに迫るが、おキミの「狂気」に接することで綾さんもまた「狂気」へと駆られていく。こうした母娘の葛藤とともにおキミの過去が断片的に語られていくのだが、これらに併せてテキストの前半部分では、からゆきさんの渡航の実態とそれに対する社会の眼差しなどが詳細に語られる。そして、後半部分では、からゆきさんたちが自らを取り巻く過酷な状況をどのように生き抜こうとしていったかが、歴史資料や他の文献からの引用とともに、森崎による（元）からゆき

---

<sup>1</sup> 大阪府立大学博士後期課程

さんの「聞き書」を通じて記される。そこでは、からゆきさんの複数的であり輻輳的でもある経験の位相が綴られており、おキミと同様の過酷さを共有しつつも、時に朝鮮や清国（中国）の義賊や馬賊、革命家、また日本人のアジア主義者らと行動をともしたり、東南アジアの地でそれぞれの「クニ」を求めていったかの女たちの姿が描かれている。

他方で、この『からゆきさん』は森崎の筑豊時代の集大成といえる作品でもある<sup>2</sup>。これまでに単著だけでも50冊以上を発表するなど膨大なテキストを書き残してきた森崎だが、その中でも、福岡の炭坑地帯・筑豊は中間に居を構えた1958年から78年までの約二十年間は、森崎が最もアクチュアルな思想の展開を見せた時期として知られる。この時期の森崎の思想を考察するうえで鍵となるのは、とりわけ60年代後半以降に森崎が用いていた流民という視座に他ならない。

植民地統治下の朝鮮で生を享け、かの地で自己の感性を形成させながら、敗戦とともにその「故郷」と切り離された「植民二世」としての自らの存在を森崎が終生問うてきたことは、つとに知られる<sup>3</sup>。だが、ここでは、森崎が筑豊時代に自らの思想課題として追いかけたのが、およそ次のような人びとであったことを想起したい。

すなわち、土地から引き剥がされ流れ着いた末に炭坑を転々としてきた（女）坑夫、孤島苦と絶対的貧困の末に出郷していった与論島<sup>4</sup>民、廃坑地帯となった筑豊から各地へと流転しては時に舞い戻ってくる若い労働者、「植民二世」の森崎の裏返しの存在ともいえる在日朝鮮人、米国から日本への施政権返還による「本土復帰」を目前にして「復帰」とはなにかを問いかけてつづけていた沖縄、そして、食うに食えなくなった農村から追われ

<sup>2</sup> 水溜真由美『『サークル村』と森崎和江』ナカニシヤ出版、2013年、335頁

<sup>3</sup> これについては、佐藤泉「いかんともしがたい植民地の経験——森崎和江の日本語」『国語と国文学』83巻11号、2006年11月、同「いかんともしがたい植民地の経験——森崎和江の日本語」青山学院大学日文学科（編）『異郷の日本語』社会評論社、2009年、を参照。なお、この二つの文章は内容的にもかなりの部分重複するが、異なる論点が提示されてもおり、ここでは個別に記述した。

<sup>4</sup> 奄美群島の南端に位置し、現在の鹿児島県と沖縄県の鹿児島側の県境の島であり、かつて沖縄が米軍統治下に置かれていた時期には、日本と沖縄（米国）との国境の島でもあった。

海を渡ったからゆきさん。森崎は、かれら・かの女らに物理的な流動性のみならず、同時に、故郷を喪失し、もしくはそもそも故郷を持ち合わせないがゆえの精神的な彷徨感覚を見出し、人びとを流民として呼び習わした。なにより、森崎は自らの存在を流民として認識していた。

私自身が流民なんですね。親たちが朝鮮へ流れていき、私は朝鮮で生まれ、戦争で追い出され、日本にうまく落ち着けなくて、都市は朝鮮での日本人町にそっくりだし、〔だから——引用者〕炭鉱に入りこんだんです。<sup>5</sup>

この流民の視座は、多岐にわたる対象・事象を追いかけた筑豊時代の森崎の思想的営為を総体として把握する視点を提供するものである。そして本稿は、この視座を基にして『からゆきさん』のテキスト分析を行っている。

これまで、『からゆきさん』をめぐる先行研究ばかりか、森崎の思想についての先行研究でも、流民の視座はほとんど注目されてこなかった<sup>6</sup>。その結果取りこぼされてきたのは、『からゆきさん』に伏流する近代のその根源的な暴力性に対する森崎の批判であり、また移動・流動がどのように人びとの思想を形成するのに関わる森崎の思想的提起であった。

これらを考える際に重要なのは、森崎がからゆきさんの経験の位相をどのように思想化していったかという点である。『からゆきさん』の先行研究の傾向では森崎の思想そのものへの注視が先行し、からゆきさんの経験的次元の森崎による思想化という観点は十分検討されてこなかった。この

<sup>5</sup> 色川大吉・森崎和江「日本民衆史の地平に——流民と常民を追って」『潮』199号、潮出版社、1976年1月、156頁

<sup>6</sup> 『からゆきさん』をめぐる先行研究には主に以下のものがある。谷口絹枝「森崎和江への一視点・覚え書——『からゆきさん』に即して」『社会文学』15号、2001年6月、水溜真由美「森崎和江『からゆきさん』をどう読むか」『女性・戦争・人権』5号、2002年12月、同『『サークル村』と森崎和江』第三部第四章「近代日本の越境者——森崎和江とからゆきさん——」（注2参照）、佐藤泉「からゆきさんたちと安重根たち——森崎和江のアジア主義」『越境広場』創刊0号、越境広場刊行委員会、2015年3月。

ため、かの女たちの経験への一見分裂的でもある記述の複雑さに込められた森崎の意図は紐解かれてこなかったのである。

本稿はそれゆえ、『からゆきさん』をそれ単独で読み解くのではなく、同時代の森崎の他のテキストとともに考察する。本稿でも注目する「ふるさと」や「幻想」といった『からゆきさん』に頻出する言葉、とりわけ前者は、当時の森崎思想の中心的な鍵概念として他のテキストにも現れている。それらの含意を理解するためにも、『からゆきさん』を森崎の同時代のテキストと対照させていくことが必要となる。

以下、第一章では、森崎の流民の視座なるものがどのような射程をもっていたのかをその後の議論の前提として見ていく。そのうえで、第二章では、森崎が流民としてのからゆきさんの「精神のあと」をどのように考えていたかを、「アジア体験」という概念にかかわって見ていく。そして、第三章では、この「アジア体験」と一見矛盾するようなからゆきさんの「故郷／ふるさと」をめぐる森崎の記述の分析を通して、森崎が見出した「ふるさと」の「幻想」というからゆきさんに独自の「力」と思想を明らかにしていく。

## 1. 流民の視座について

### 流民の系譜

先に触れたように、森崎が筑豊時代に思想課題として追いかけたのは流民——（女）坑夫、与論島民、沖縄、閉山後筑豊の若い労働者、在日朝鮮人、からゆきさんなど——という存在であったが、かれら・かの女らは全く個別に存在したわけではない。むしろ、それぞれは密接に結びつき、相互に関連付けられていた。

明治以降に本格的に採炭が開始される石炭は、以後一貫して日本の近代化と軍事化の重要な動力源であった。炭坑とその周辺には各地の農村や、明治以降日本国家に併合された沖縄、与論島など「辺境」から流入した貧困層、また強制連行された朝鮮人労働者などが寄せ集められて／寄せ集まっていた。一方で、からゆきさんが海外に渡る際には港から輸出される

石炭船の奥底に押し込められていく場合が多く、からゆきさんの渡航先と石炭船の輸送路とは重なっていた<sup>7</sup>。また、近代公娼制度下で新たに娼婦となっていたのは、松方デフレなどによって近代日本の資本主義体制下で困窮した貧農・都市下層民の女性たちであり、かの女たちの一部が「内地」の軍都、そして朝鮮などに渡っていった<sup>8</sup>。当時の福岡の新聞資料などからからゆきさんの出身地を割り出した森崎によれば、そもそも坑夫とからゆきさんの出身地には重なるところが多かったという<sup>9</sup>。こうした意味で、両者を生み出したのは日本の近代化そのものであったといえる。

そして、敗戦＝終戦によって、炭坑の朝鮮人労働者やその家族の一部は朝鮮半島へ帰還するが、一方で炭坑は旧植民地などからの引揚者を含む新たな労働力を引き寄せた。だが、1950年代半ばからは人びとを炭坑の合理化と閉山の圧力が襲う。近代日本の「発展」の動力源でありつづけてきた石炭は、この時期、国家主導のエネルギー政策の転換によりその座を石油にとって代わられる<sup>10</sup>。坑夫とその家族たちは整理解雇や閉山に対する抵抗を試みるが、膨大な人びとが次第に炭坑から各地へ流出して散らばっていった<sup>11</sup>。そして、60年代の閉山後の筑豊や隣接する北九州では、若い労働者たちが時に全国各地を回りながら下請けの職を転々としており、森崎はかれらの存在を「流民型労働者」と呼んだ。こうした流民型労働者らと森崎が60年代末から取り組んだのは、「本土復帰」を目前に控え労働力の日本（本土）への流出が危惧されていた沖縄で、それまでの祖国復帰運動を乗り越えるべく闘われていた沖縄闘争にかかわる運動であった<sup>12</sup>。

このように見ると、森崎は炭坑を起点としながら流民の系譜ともいうべ

<sup>7</sup> 倉橋克人「『からゆき』と婦人矯風会（1）——九州の一地域女性史の視角から」『キリスト教社会問題研究』51号、2002年12月、53-54頁（注55）、清水元『アジア海人の思想と行動——松浦党・からゆきさん・南進論者』NTT出版、1997年、104-109頁。

<sup>8</sup> 藤目ゆき『性の歴史学——公娼制度・墮胎罪体制から売春防止法・優生保護体制へ』不二出版、1997年、93-97頁

<sup>9</sup> 森崎和江『からゆきさん』朝日新聞社、1976年、42-44頁

<sup>10</sup> 永末十四雄『筑豊——石炭の地域史』日本放送出版協会、1973年、223-242頁

<sup>11</sup> また、こうした坑夫の家族の中からは、新たに売春婦や性産業に従事していった女性たちも数多く存在したという。前掲書『性の歴史学』381-384頁を参照。

<sup>12</sup> これについては、拙稿「『わが』の思想について——森崎和江と沖縄をめぐる覚書」『脈』91号、脈発行所、2016年11月、を参照。

きものを採り当てていたことがわかるが、この流民の系譜を一貫して貫くのは、近代以降の人を流動化の渦へ投げ込む資本と国家が一体となった暴力の存在である。

### 人を移動させる暴力<sup>13</sup>

帝国日本がその勢力圏において幾つもの交差する人流を発生させてきたことについては、言を俟たないだろう。朝鮮、台湾、満州、北海道、南樺太、南洋群島、東南アジア、北米、南米などへの「内地」出身の日本人の移民・植民はもとより、朝鮮人・中国人労働者の強制連行を含む「外地」から「内地」への移動、先にも述べた沖縄や奄美群島などの地域から日本本土や「外地」への移動、また日本本土内での農村から都市への移動などがそこにはあった。これらの移動は多くの場合、当事者にとっては生活と文字通りの生存をかけたものだった。そこでは資本と国家——また軍事——が一体となった暴力的な土地からの人の追い出しと、その中でなお自律性をもって移動し生き延びようとする人びとの営為とがせめぎあってもいた<sup>14</sup>。

他方で敗戦＝終戦後、旧帝国となった日本は、旧植民地出身者を「外国人」として切り捨てていく一方で、旧外地に居住する在外日本人の日本本国への「帰国」を必ずしも進んで引き受けたわけではなかった。敗戦＝終戦直後の当初には在外日本人の当地への残留・定住方針が取られており、こうした方針が「帰国」・引揚げへと転換した後も、日本政府はただちに積極的な引揚げ政策を展開したわけではなかった<sup>15</sup>。引揚者の存在は戦後の混乱の中で食糧不足と住宅不足に悩まされた日本にとっては過剰人口とみなされていたのである<sup>16</sup>。

<sup>13</sup> 本節での議論の見取り図の一部として、伊豫谷登士翁「政治の陰としての「移民」」同（編）『移動の経験——日本における「移民」研究の課題』有信堂高文社、2013年、の議論に学んだ。

<sup>14</sup> 蘭信三「序——日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学をめざして」同（編）『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』不二出版、2008年、xii-xiii頁

<sup>15</sup> 加藤聖文「大日本帝国の崩壊と残留日本人引揚問題——国際関係のなかの海外引揚」増田弘（編）『大日本帝国の崩壊と引揚・復員』慶応義塾大学出版会、2012年、20-25頁

<sup>16</sup> 同上

そして、「帰国」しながらも植民地で築いた財産を失って路頭に迷い、また治安維持に際しての警戒対象として眼差される中で<sup>17</sup>、引揚者たちは戦後の農地開拓政策に参加ないしは動員されたり、朝鮮人坑夫が大量に帰還（引揚げ）した後の炭坑に労働力として吸収されていった<sup>18</sup>。だが、農地開拓は過剰人口となった引揚者に対する場当たりのな処遇政策の面も否めず、農業に適さない土地をあてがわれて開拓に失敗したり、開拓地が後の米軍基地建設や空港建設に際して強制接収の対象となるなどし、結果、多くの引揚者たちは戦後において再度「難民」化していくことになる<sup>19</sup>。また、既述したように、1950年代半ばから各地の炭坑は相次いで合理化や閉山の対象となるが、こうして戦後の日本社会からも「難民」となった開拓民や坑夫たちの一部は、その後南米への農業移民として海を渡っていくこととなる<sup>20</sup>。人びとはしばしば「棄民」として語られた<sup>21</sup>。

1950年代前半、日本は対外的にはサンフランシスコ体制によって独立と東アジアでの安定的地位を獲得し、また朝鮮戦争による朝鮮特需などによって敗戦からの「復興」を遂げていった。だが、この最中において、戦後の国策に翻弄された膨大な人びとが存在した。帝国が引き起こした幾つもの人流は敗戦＝終戦によって逆流を引き起こしたが、戦後日本はこの逆流を戦後「復興」に「再利用」し、のちには切り捨てていったのである。人びとは「再度」流動の過程へと追われていった。ここにおいて、骨がら

<sup>17</sup> 安岡健一『「他者」たちの農業史——在日朝鮮人・疎開者・開拓農民・海外移民』京都大学学術出版会、2014年、190-192頁

<sup>18</sup> 第二章で後述する森崎らとの対談の中で記録作家の上野英信は、次のように述べている。「これは戦後移民に共通していることだろうと思いますけど、びっくりしたといふかなるほどどうなずいたといふか、炭鉱離職の場合、中南米に移住した人たちはほとんど、戦前に朝鮮・満州・台湾などへ移住していて、敗戦後ひきあげてきた人たちです。しかし、日本のふるさとは受け入れられず、炭鉱を転々と渡り歩いたあげく、閉山後はふたたび海外へとおちのびたわけです」。森崎和江・上野英信・金原左門「もうひとつの移民論——移民史への視角」『歴史公論』5巻1号、雄山閣出版、1978年1月、39頁。

<sup>19</sup> 道場親信「戦後開拓と農民闘争——社会運動の中の難民体験」『現代思想』30巻13号、青土社、2002年11月、232-233頁

<sup>20</sup> 道場親信「「復興日本」の境界——戦後開拓から見えてくるもの」中野敏男ほか（編）『沖繩の占領と日本の復興』青弓社、2006年、268-271頁

<sup>21</sup> 国家に棄てられ、国家を棄てたこの「追われゆく坑夫」たちの足跡を南米まで追いかけたのが、上野英信『出ニッポン記』潮出版社、1977年、に他ならない。



みに一体となった資本と国家が人びとをその進出（侵略）先へと振り向けていく暴力の位相は、戦前戦中と戦後にあるとされた断絶を架橋するものとなるだろう。戦後の農地開拓を分析する中で道場親信は、「〔戦後開拓〕は「帝国」が「国民国家」の衣装をまとうために偽装された国内植民地だったのかもしれない」とした<sup>22</sup>。

### 労働と故郷

このように考えると、森崎が筑豊時代に思想課題として追いかけたのが流民であったことは、森崎の思想が帝国とその下で成立していった日本の近代そのものに依然として底流しつづける根源的な暴力を、戦後という地平のうえに顕現させ問題化するものであったと捉えることができる。

だが、森崎が流民を一貫した思想課題としたのは、人びとの移動を差配しようとする資本と国家の暴力にのみ着目してのことではない。流民の視座には、故郷喪失者である人びとが、労働によって自らの拠って立つ基盤を追い求める姿と、それを追いかける森崎自身の姿が同時に刻み込まれている。森崎は1960年の三井三池炭坑での合理化反対闘争（三池闘争）の支援に向いた際、泊めてもらった与論島出身者の社宅にいた老女についてのエピソードを、しばしば自身の文章で取り上げていた。

その時私は与論島の正確な位置を知らなかったが、病床にいた老女が、わしも子も孫もこの三池で働いたのに……島を出でずっと三池で働いたのに、なしてこの家の下の土くらいわしらのものにならんと、と涙を流したことが強く心に残った。ほんとうに、なぜ寝ている床下の土くらいは労働をする者の自由にできないのか。その素朴だが本質的な問はこの社宅街にねっとりとたまっていた。<sup>23</sup>

これは、土地の所有権を求める言葉ではない。自分たちが出郷の末に血

<sup>22</sup> 前掲「戦後開拓と農民闘争」236頁

<sup>23</sup> 森崎和江・川西到『与論島を出た民の歴史』たいまつ社、1971年、221頁

と汗を流しながら働いてきた苦闘のその証となりえるものを老女は求めたのであり、森崎はこの老女の声を忘れることができなかった。そして、このとき、人を移動させる暴力とは物理的な移動の側面のみならず、人びとの精神性そのものにも向けられていたことが理解されるだろう。故郷を追われたものたちが、労働と生活を介しながら自らの落ち着く先、「魂のくに」をどのように見出していくかは、森崎が炭坑（筑豊）を起点とした流民の視座にかかわって追いかけてつづけた主題である。

当然ながら、からゆきさんが半強制的に置かれたその「労働」が買売春であった以上、ここではそれを他の流民の労働と同一視することはできない。そこには階級や民族による分断線のみならず、性による分断線が刻まれているからだ。だが、森崎はこのような経験的位相に、構造的に置かれた立場が異なりもする無数の流民たちが共有しえる地平があることを理解していた。

そして、こうした森崎の流民の視座を念頭に置きつつ、以下の節では、具体的に『からゆきさん』とそれに関連する森崎のテキストを検討することとしたい。

## 2. 流民の「アジア体験」

### 流民の精神史

森崎は『サークル村』以来の親交がある記録作家の上野英信らとの移民をめぐる1978年の対談の中で<sup>24</sup>、次のように『からゆきさん』執筆のモチーフを語っている。

けれども生活者というのはそういうふうに出ていきたくて出ていったわけではなく、食いつめて出ていくわけですからね。そしてそこで、いかに生きるかを自分に問いつづけているんです。先達のいない荒地に注がれている思想性というのはたいへんなものだと、炭鉱にきてし

<sup>24</sup> 掲載雑誌の出版日（1978年1月）などから対談が行われたのは1977年とも推測される。

みじみ思いました。私は国外に売られた女を書こうと思ったわけではなくて、そういうふうには村から追われるように出て、くりかえし一人になって開拓していった、名もない人びとの精神のあとをたどりたいたいと思ったわけです。それをたどるためには、私が女として生まれたこと、さらに国外で生まれたこと、そういうものを重ねて掘らなければ身動きできませんから、たまたま『からゆきさん』という形で書いたわけです。<sup>25</sup>

ここで明らかなように、森崎は炭坑とそこで働く坑夫を、からゆきさんとのある共時性と共通性のもとに把握していた。そして、前章で指摘したように、森崎は炭坑—坑夫とからゆきさんを構造的要因からのみ捉えていたわけではない。「出ていきたくて出ていったわけではなく、食いつめて出てい」かざるをえず、流れ着いた場所で「いかに生きるかを自分に問いつづけ」ながら、「くりかえし一人になって開拓していった、名もない人びとの精神のあと」がかれら・かの女らを結びつけるのであり、人びとを取り巻く構造が全てなのではない。それでは、流民である坑夫とからゆきさんにとってこの「精神のあと」とはなんだったのだろうか。

森崎は、『からゆきさん』に先立つ二年前の1974年、副題に「炭坑労働精神史」と冠した書き下ろしの著書『奈落の神々』を上梓している。炭坑の成り立ちから戦前戦中期までの歴史を綴ったこの『奈落の神々』で森崎は、炭坑についての歴史書では必ず触れられるであろう坑内でのストライキや労働争議などを語ることはしなかった。その代わりに森崎が選択していったのは、炭坑という地上とは隔絶された地下労働の異世界で、坑夫たちが編み出していった独自の風習や禁忌という、かれら・かの女らの精神史に着目することであった。

森崎はこの中で、炭坑がその当初から農村の脱落層や各地を渡り歩く旅人たちの労働によって成り立っていたことを指摘し、人びとの共働が炭坑を駆動させる一方で、より良い炭坑<sup>ヤマ</sup>を求め逃散していく坑夫とこれを押し

<sup>25</sup> 前掲「もうひとつの移民論——移民史への視角」31頁

留めようとする会社一納屋頭の間での駆け引きを書き記している。そして、会社側からの十分な安全設備も与えられない炭坑での労働とは、まったく闇の中を文字通り命懸けで掘り起こしていく作業であった。それゆえ、そこでは地上の農村におけるのとは異なった特異な信仰が形成されていったという。それは坑夫たちの様々な出身地の信仰が寄せ集まってできたものだった。

炭坑の大資本による独占化がすすみ、筑豊の町の下、村の下、田畠や川のその下の近くは空洞をひろげ、死傷者は増加をたどり、一方では暴力的な募集によって、九州・四国・中国そして朝鮮から貧困層が流入した。各地方から持ちこまれる現世利益の神仏が、非常〔引用者注——坑内での事故を指す〕の連続に対する、なま身の唯一の防備具のように炭住に充満した。非常を防ぐための技術面には全く投資されず、坑夫の死傷に対する救済法もなかった。そうした中で石炭は掘り出され、近代産業・軍事は強化されつつあったのである。シャマンたちの神仏は坑夫と死霊たちの最も身近かな守り神であった。<sup>26</sup>

異種混淆としたこうした精神史の中に、森崎は流民である坑夫たちの経験が結晶化される在り方を探った。そして、『からゆきさん』もまた、この精神史という森崎の方法論のうえに結実したものであり、森崎はその際、からゆきさんの「精神のあと」の核となる部分を「アジア体験」として捉えた。

### 「精神のあと」としての「アジア体験」

「アジア体験」という言葉は、『からゆきさん』の中には現れることがなく、むしろ『からゆきさん』を執筆時の1974年にある雑誌に寄せた文章「からゆきさんが抱いた世界」に類出するものである。だが、『からゆきさん』の発表直後の短い談話形式の文章でも森崎は「“からゆきさん”のなか

<sup>26</sup> 森崎和江『奈落の神々——炭坑労働精神史』大和書房、1974年、330-331頁

には、女の性の歴史が、国が同伴した“アジア体験”として在るわけですよ」と語っている<sup>27</sup>。以下では、この「アジア体験」の位相を具体的に見ていく。

『からゆきさん』には冒頭で触れたおキミ以外にも、様々なからゆきさんの姿や声書き留められている。そこには、多くのからゆきさんが過酷な状況下で若くして亡くなった中、なんとか日本に帰郷することのできたからゆきさんたちの声が取められてもいる。だが、かの女たちにとって故郷はもはや自らが心を落ち着かせられる場所ではなくなっていたという。

森崎は故郷へと帰還した（元）からゆきさんたちが「内地は好かん」や「内地人は腹のこまか」とこぼすのを幾度となく聞き取っていた<sup>28</sup>。そして、からゆきさんとしてのかの女たちの生活は「植民地で逃亡不可能に近い買春の日々を強要された」ものであったことを絶えず確認しながら<sup>29</sup>、その生活の中でもかの女たちは独自の感覚を涵養していったと森崎はした。

それはたとえば、売春の客たちの中では同胞である日本人の方が厄介な客であり、現地人の客の方がこちらの要求を聞き入れてずっと「やさしかった」という実感にあるという。また、一見して帝国日本の侵略を下支えするナショナリズムと同一視されるようなからゆきさんの行為や発話のなかにもそれが潜んでいることを、森崎は見出していた。

おキミと同じく天草・牛深出身であり、からゆきさんとなったのちに商売人へと転身しシンガポールやインドを渡り歩いた島木ヨシ（以下、ヨシ）は、自身がインドで開いたマッサージ店に雇った同じく元からゆきさんの女性たちに、「ジャパニーズ・レディ」としての誇りを持ち、「生きた日の丸」として「民間外交」を立派に担うのだとあって発破をかけたという。ともすれば無邪気な帝国意識の発露ともとられかねないナショナリズムの外皮をまとったこうした言葉の中にあるのは、森崎によれば、ヨシが異郷

<sup>27</sup> (A)「グラビア（著者とその本）『からゆきさん』の森崎和江氏」『新刊展望』20巻5号、日本出版販売株式会社、1976年5月、頁番号なし

<sup>28</sup> 森崎和江「からゆきさんが抱いた世界」『現代の眼』15巻6号、現代評論社、1974年6月、122頁

<sup>29</sup> 同上、121頁

のアジアの土地で人びとに受け入れられ、迎えてもらうための心構えであり、周囲に恥じるようなことはしないという決意が込められていたという。このことは、「日本人の気性をお目にかけてみましょう」といって清国で馬賊とともに行動していったからゆきさんや、日露戦争の際に祖国である日本に献金したからゆきさんの想いとも重なる。これらを森崎は、祖国である日本が国としてアジアの国々と結びつくことをかの女たちが願うものであったとする。そこには「あなたをわたし（日本）は裏切りません」と「同じような境遇の他国人に対して」呼びかけるような想いが託されていたのであり、森崎は安重根もまた日露戦争時には日本に希望を託していたとした<sup>30</sup>。

しかし、かの女たちのこうしたアジアへの想いは、最終的には帝国と化していく日本の侵略の現実によって消し去られていった。日露戦争に勝利した後、朝鮮を支配下におさめ更なるアジアへの侵略を目指す日本が行う鉄道敷設工事の現場先には娼館が作られていったが、そこで働かされた日本人女性のうちの一人がおキミであった。工事現場で日本人の現場監督から日常的に暴力を受けていた朝鮮人（男性）労働者たちは、日本の植民地支配による苦しみと慟哭をぶつけるように、日本人の娼婦であるおキミを買い、かの女を尿が漏れるまで座らせて立つことを許さなかったという<sup>31</sup>。

また、満州事変以降、日本が国際社会から一層孤立を深めていくと、ヨシのインドでの立場は困難なものとなっていき、かの女は遂には日本へと帰国せざるをえなかった。その後、ヨシは晩年を天草で過ごすことになるが、日本が米国と開戦するに至り、周囲に対して「こがんこまんか国が世界の白眼ばうけて、なんのよかこつがあろうか。日の丸ば、よごして」と憤り、「わしらがどげえ民間外交ばしたっちゃ、国がそれば汚してしまう

<sup>30</sup> 前掲書『からゆきさん』172-173頁

<sup>31</sup> 歴史修正主義が跋扈する現代においては、これに利することになるであろう「醜聞」に等しいそのエピソードをあえてそれでも書き込み、またからゆきさんと安重根との未明の逢いともかかわらせていく森崎に、森崎が敬愛した竹内好の「アジア主義」とは異なる「裏地のアジア主義」を析出したのは、佐藤廉「からゆきさんたちと安重根たち」（注6参照）、であった。

なら、わたらの仕事は国に殺されよるも同じこっちゃ」といい切ったという<sup>32</sup>。

からゆきさんたちにとって故郷への帰還は安らぎとはならず、そこはもはや異郷のように思えていったのである。だが、逆説的に、こうした感覚の中にこそ森崎が見出したかの女たちの「アジア体験」の意味は詰まっていたといえる。

〔からゆきさんたちの——引用者〕「帰ってこんがましじゃった……」との怒りと悲しみの声音のなかには、実に多面な、思想のカオスのごとき体験がつまっている。アジアへの心の広がりや国家的侵略。アジア諸民族との接触と戦争。その接触の性の姿……。<sup>33</sup>

からゆきさんたちは絶望的にも思われる抑圧的な状況下でそれぞれの土地に根付きながら、どこでもその土地の民として生きていこうとした。帝国としての祖国やそこに住まう人びとはからゆきさんの生活を「土民志向型<sup>34</sup>」の遅れたものとして認識するようになっていったが、その生活から森崎が見出したのは、帝国とからゆきさんの意識の間での断絶であった。先の「帰ってこんがましじゃった」と帰郷を後悔するからゆきさんたちの言葉が「けっして自由とはいいいかねる売春生活の場」での経験によって「吐かれたことに、私は応答のしようのない心境に追われた」ことを吐露しながらも、森崎はからゆきさんたちの感覚の中にこそ「民衆自身による内的開拓」があると<sup>35</sup>。それはたとえばかの女たちに「多様な民族の拮抗によって開拓されるインターナショナルな心情世界」をもたらしたという<sup>36</sup>。帝国のアジア（「大東亜共栄圏」）とからゆきさんの「アジア体験」

<sup>32</sup> 前掲書『からゆきさん』203頁。それでもヨシは戦局の悪化に伴う金銀銅などの供出の要請に、自らのインド時代の貴重な思い出の品々を差し出すことで応じた。それは、ヨシのナショナリズムの限界であるが、このことによってかの女の全てを断罪することもまた不可能である。

<sup>33</sup> 前掲「からゆきさんが抱いた世界」123頁

<sup>34</sup> 同上

<sup>35</sup> 同上、122頁

<sup>36</sup> 同上

は重なり合ってしまうこともあったが、決して同一のものでもなかった。

そして、その「内的開拓」の姿は炭坑で自らが感じ取ったものでもあるとしながら、森崎はこのことが長らく忘却され見向きもされてこなかった現実を指摘した。

それは潜在したままであり、方向付けこそ行われていないけれど、ひとすじの血のように、流れ発光するものがある。からゆきさんはからゆきさん仲間うちでは自明な何ものかを、外側から判断すれば全面的な奴隷状況下で、はらんでいた。<sup>37</sup>

未だ言語化されざるこの感覚を追いかけることが、森崎が自らに課した課題であったのだ。しかし、ここでは最後に、一面的な解釈を受け付けなからゆきさんたちの精神世界を、森崎が次のような一文によって書き留めていたことを記しておく必要がある。その形容・要約不可能な重みは、からゆきさんの「アジア体験」を捉えることの途方もない困難さを伝えるものである。

そこには性と階級と民族と国家とが、観念としてではなく、いたいたけな少女への強姦のようにして煮詰まり渦巻き青白い炎をあげているのである。それはすべて深く関連していて、どれか一側面ばかりを受けとめようとしても、からゆきさんには無縁なこととなるだろう。<sup>38</sup>

### 3. 「故郷」と「ふるさと」のあいだ——「力」としての「幻想」

前章では、森崎がからゆきさんの流民としての「精神のあと」を「アジア体験」に見ていったことを述べてきた。一方で、『からゆきさん』の中で森崎は、からゆきさんの多くが九州は島原や天草の出身であり、それは、

---

<sup>37</sup> 同上、122-123頁

<sup>38</sup> 同上、123頁



島原・天草の環境や風土、性意識などに起因するとしていた。そして、からゆきさんが海を渡っていったのは、こうした故郷の土地で形成された開放的な感覚によるものだとした。

実は、そのようなくらしへむかってひらいていく感性を、からゆきさんの多くは、ふるさとを出るときからもっていたのである。村の若者宿や娘宿でそだてられた心情をもち、人から人へかようころのあることを信じ、だれかがくらししているところなら、唐天竺であろうとも生きていけぬはずはない……とかの女たちはふみだしていったのである。親代々よそへ稼ぎにっていた村むらがつたえてきた開放的な気質である。<sup>39</sup>

ここで、森崎はからゆきさんがアジアで生き抜いていった理由をかの女たちの故郷の風土に求めているように読める。だが、からゆきさんは故郷を離れ流民として生き抜く中で「アジア体験」を会得していったはずである。本章では、一見して矛盾を抱えたこうした森崎の故郷への理解について、それらが含意するところを丁寧に分節化して見ていきたい。その際に重要となるのは、本稿の冒頭でも触れた、「ふるさと」と「幻想」という二つの——もしくは一つの——概念である。

### 『からゆきさん』の危うさ

そもそも、森崎が説明しているように、「からゆきさん」という言葉自体は九州北西部に伝わるものである。この地域から「唐（から）」つまり中国大陸の方へと出稼ぎに渡っていく人びとを称して「からゆき（唐行き）」と呼んだのであり、このうち、主に娼婦となる女性たちが「からゆきさん」と呼ばれたという。

そして、森崎は、島原・天草から多くのからゆきさんが生み出された理由を、かの地の絶対的な貧苦と海に面し他郷との接触を長らく保ってきた

<sup>39</sup> 前掲書『からゆきさん』217頁

地理性に加え、農村由来の解放的な性愛文化の伝統にあるとした。若者たちは若者宿や娘宿という場所に集まっては一对一の関係性に限定されることのない「幅広い性愛」の関係を育てていたのであり、こうした性愛文化は村の娘たちをのちからゆきさんとして生き抜かせたのだという。

わたしはからゆきさんがこのような〔天草の——引用者〕風土のなかで育ったことを心にとめておきたいのである。ここにはりくつぬきの、幅広い性愛がある。それは数人の異性と性愛を不純とみることのない、むしろ、性が人間としてのやさしさやあたたかさの源であることを、確認しあうような素朴なすがたがある。

(…)

村から外へ出るときも、娘たちは娘宿ではぐくまれた感情を心にたたえた娘のままであったにちがいない。人間をやさしく抱擁するという感じかたをもつうらは、人を疑う力にとほしく、たのまれればふところへ抱き込むことを、生きることだと考えただろう。<sup>40</sup>

こうしたアプローチは、しかし故郷の理想化と隣り合わせの危ういものでもあり、それゆえ森崎の筆致はかの女の意図に反した文脈に回収されかねない余地を残してもいる。ここでは二つの文脈を指摘する必要がある。

まず、こうした島原・天草の風土にからゆきさんの存在を結び付ける言説は、翻ってかつて、戦前の娼婦運動がからゆきさんら海外娼婦を島原・天草に特有のものとして特殊化して糾弾し、地域全体を改良の対象として認識していたことと表裏一体のものとならざるをえない<sup>41</sup>。宋連玉は戦前

<sup>40</sup> 同上、56-57頁。このすぐあとの段落で森崎は、「村むらは貧しかったのだ。が、そのひもじく、寒いくらしの底にこの血汐は流れつづけた。おおらかで、そしてふてぶてしいエネルギーを脈々と流してきた。この気脈なしに娘たちも村びとも「からゆき」を生きぬくことはできなかった。新しい国家としての明治日本は、出稼ぎするほかにはひもじさを癒せない人びとに対して、全くなんの力にもならなかった」(57頁)と指摘している。だが、それでもここで引用した個所は『からゆきさん』に内包された危うさを象徴しているように思われる。

<sup>41</sup> 嶽本新奈『「からゆきさん」——海外<出稼ぎ>女性の近代』共栄書房、2015年、150-155頁

の廢娼運動を「帝国のからゆきさん言説」と形容したが<sup>42</sup>、このことに森崎はどれほど意識的であっただろうか。

またそれは、主として1960年代から台頭するルポルタージュやイエロージャーナリズムの世界でのからゆきさんへの好奇に満ちたまなざしと、囂らずも近似したものになりかねない。この時期、男性の書き手たちがエッセイや週刊誌上の記事などでからゆきさんを一方では卑しい存在として表象し、他方では家族のために尽くしたけげな女性として美化しては憐憫な語りに回収しようとしていた。

こうした極めて男性中心主義的なからゆきさんの表象とその言説に対して批判を展開したのは、山崎朋子の『サンダカン八番娼館』（以下、『八番娼館』）であった<sup>43</sup>。1966年から「アジア女性交流史研究会」を主宰し<sup>44</sup>、近代以降の日本とアジアの底辺女性たちの交流史を追及してきた山崎の『八番娼館』は、からゆきさんを取り巻いた家父長制と性差別（性暴力）の抑圧を指摘し、これを厳しく批判した。

『八番娼館』は、山崎自身がからゆきさんの経験を悲劇的なものとしてのみ断定的に解釈しており、また山崎の中に潜在する東南アジア原住民へのレイシズムが露わになっているなど、多くの問題を内包している。森崎の『からゆきさん』執筆の要因の一つにはこうした『八番娼館』への批判があったのだが<sup>45</sup>、一方で『八番娼館』や『からゆきさん』が執筆された1970年代は、日本においてウーマン・リブ運動が進展した時期であり、また日本人男性による韓国への妓生観光に代表される、アジア各地への買春観光などが国際問題となってもいた<sup>46</sup>。その中では、買売春を行う男性身

<sup>42</sup> 宋連玉「「慰安婦」・公娼の境界と帝国の企み」『立命館言語文化研究』23巻2号、2011年10月、206頁

<sup>43</sup> 山崎朋子『サンダカン八番娼館』筑摩書房、1972年

<sup>44</sup> この研究会の機関誌『アジア女性交流史研究』の第一号（1967年）を読んだ森崎は山崎に手紙を送り、正式に研究会の会員となると、一時期は雑誌の編集委員を務め、筑豊・北九州では独自に姉妹研究会を作るなどしていた。山崎と森崎の交流については、山崎朋子「『アジア女性交流史研究』の思い出」同・上笹一郎（編）『アジア女性交流史研究』港の人、2004年、を参照。

<sup>45</sup> 前掲「からゆきさんが抱いた世界」を参照。この点については、嶽本新奈『「からゆきさん」』（注41参照）の序章および終章も参照。

<sup>46</sup> 松井やより『女性解放とは何か』未来社、1975年、を参照。

体を問題化すべく「買春」という言葉が意識的に選択されるなどしていた<sup>47</sup>。

森崎の農村の性意識についての記述は、ともすればこうした同時代的な言説の水準とは釣り合わないものでもある。次の引用は、『からゆきさん』の自著解題的な文章からだが、ここでの「ただの男や女」とはいったい何を意味するのだろうか。

からゆきさんはアジアの申し子です。まだ近代国家の生まれるまえ、女の性なのです。くにながのりあげるまえ、アジアは、国から思い思いにあふれだしてさまよう、はだしの人間たちのものでした。かつての封建の秩序はくずれ、まだ近代という歯車もない。男や女も、ただの男や女でいることができました。<sup>48</sup>〔傍点——引用者〕

森崎はこのようにして危うさを冒しながらも、故郷の風土やそこでの性意識を美しいものとして記述した。それは、騙されることを時にうすうすと気づきながら、それでも海（の）外へ渡っていたからゆきさんたちの心情に寄り添おうとするためだと考えられるが、一方で、『からゆきさん』にはかの女たちの故郷についてのこうした記述とはベクトルの異なる既述も存在する。そして、この異なる記述を同時代の森崎の他のテキストと照合するとき、森崎は単に故郷の風土を美しいものとして理想化していたのではないことが理解される。また、そこにこそ、流民であるからゆきさんの経験をどのように森崎が思想化していったかを明らかにする鍵がある。

## 「力」としての「幻想」

森崎は『からゆきさん』において「故郷」と「ふるさと」という一見同義な概念を差異化させて用いている。森崎は、「故郷」を実在の領土的な

<sup>47</sup> 高橋喜久枝「日本の性侵略を恥じる——「キーセン観光」反対の運動から」『統一評論』147号、統一評論社、1977年8月、を参照。

<sup>48</sup> 森崎和江「噴きあげる存在の毒」『週刊読書人』1134号、読書人、1976年6月7日、1頁

概念であり実際に人びとが生まれ暮らした場所として用いる一方で、「ふるさと」を「故郷」から離れた人びとが自らの心に思い浮かべる記憶としての心象風景を表す言葉とした。この「故郷」と「ふるさと」の分裂とズレはあくまで森崎が設定したものであり、当の（元）からゆきさんたちが設定したものではない。だが、この分裂とズレの中に、森崎はからゆきさんが「故郷」≡「ふるさと」を想いながら、それゆえに現実の「故郷」≡「ふるさと」とすれ違っていかの女たちのアンビバレントな感覚を表現しようとした。

落ちつき先を心にさがす女たちに、ふるさとの水があわなくなるの  
だろう。ながらく、くにの外にいて、数カ国のことばを話すようになり、  
心に描くふるさとと現実の故郷とはどこかくいちがってくるのだ  
ろう。<sup>49</sup>

そして、一方でそこには常に、「故郷」≡「ふるさと」の残酷さに対する森崎の冷徹な認識があったことを忘れてはならない。『からゆきさん』の執筆段階にあった時期のある文章で「ふるさとやその方言を失った流民は私一人ではありません」とした森崎は、「昔からたくさんの人びとが、ふるさとからこぼれ落ち」たことを指摘し、「ふるさとはこぼれ落ちた人を捨てることで成り立ってきたとって過言ではありません」と断言した<sup>50</sup>。

何より故郷の貧しさは絶対的で、容易には帰還を許さなかったのであり、「ふるさと」とは「故郷」の村落共同体から「こぼれ落ち」「脱落<sup>51</sup>」したものたちのものであった。したがって「ふるさと」それ自体は文字通りからゆきさんたちの「幻想」であるのだが、この「幻想」を、森崎は単なる儂いかの女たちの夢幻だとはしなかった。

<sup>49</sup> 前掲書『からゆきさん』215頁

<sup>50</sup> 森崎和江「ふるさと考（五）露店のおもちゃ」『暗河』10号、葦書房、1976年1月、106頁

<sup>51</sup> 森崎和江「ふるさと考（二）さわって!」『暗河』6号、葦書房、1975年1月、108頁（傍点は引用ママ）

在日朝鮮人の元坑夫の老婆とからゆきさんを重層的に重ね合わせた1975年のある文章の末尾で森崎は、それまでの文章中の文体から一転して、やや特異な表現を用いながら次のように「ふるさと幻想」なるものを唱えた。

ふるさと幻想を新たにせよ。その物神崇拜的な自愛本能を組みかえよ。いまはしづかにほほえみかけよ、異族排除の山河に、そなたの任は終わりました、ありがとう、と。<sup>52</sup>

この部分について、水溜真由美は『からゆきさん』を読み解いた先行研究の中で、「ふるさと」という「幻想」が時に「半日本人」であると称されてしまう在日朝鮮人やからゆきさんのように「ふるさと」を追われた人びとにとって安らぎとなるものではなく、それゆえに、森崎はその「幻想」の組み換えを唱えたとする<sup>53</sup>。

だが、この水溜の解釈は、「幻想」をあくまでもネガティブなものと捉えることで、森崎が「ふるさと幻想」という言葉に仮託した積極的な意味を取り逃がしてしまっている。森崎がここで批判したのはあくまでも「かつての農漁村共同体への追慕に終始」する「伝統的な「ふるさと」幻想」の姿であり<sup>54</sup>、からゆきさんが抱いた「ふるさと」への「幻想」それ自体を否定したわけではない。

もちろん、「幻想」は、幻想であるがゆえに、やがてはアジアとともに生き抜こうとしたかの女たちを深く傷つけだろう。森崎はかの女たちの夢を帝国日本は裏切り、いつしかその夢は大東亜共栄圏へと篡奪されていったこと、かの女たちも侵略の「尖兵」となっていったことを書き留めている。しかし、からゆきさんたちの「幻想」そのものに込められているのは、流民であるかの女たちの痛切な「アジア体験」であり、森崎はその「幻想」が裏切られていく残酷さの中に、かの女たちの「幻想」が抱く理想の深淵を見出さずにはいられなかった。

<sup>52</sup> 同上、109頁

<sup>53</sup> 前掲「森崎和江『からゆきさん』をどう読むか」84-85頁

<sup>54</sup> 前掲「ふるさと考（二）さわって！」109頁

民衆の思想的創造力はその生まぐさい混沌のなかにある。ふるさとを追われ、生み出したものをうばわれ、なお生きている幻想力のなかに。<sup>55</sup>〔傍点——引用者〕

それはかの女たちの「力」である。「アジア体験」と「ふるさと」が混流した「幻想」から生み出されたこの「力」は、祖国である帝国の欺瞞を見抜いては、いつの間にか「故郷」と祖国なるものの自明視された唯一性や絶対性を踏み越えていってしまうものだった。それが現実には可能性の次元にとどまるものだったとしても、私たちがそこで取り逃がしてはいけないのは、「幻想」の残酷さではなく、「まずしい孤独な女」であるからゆきさんが「幻想を後生大事に、いつの日か現実のものにしようと生きていた姿」ではないだろうか<sup>56</sup>。森崎はそうしてかの女たちの「力」と思想を聞き取ったのである。『からゆきさん』の中で森崎は次のように綴った。

からゆきさんは村むらで「郷に入れば郷にしたがう」という心で生きていた。〔プノンペンでフランス人と結婚しフランスでも天草の田舎と変わらず暮らしていった（元）からゆきさんの——引用者〕おサナをはじめ、海をわたったからゆきさんはそのことばのまことのころを知っていたのかもしれぬ。わたしなどには忍従を強いるものとしかきこえぬけれども。からゆきさんのなかには海のむこうの郷にいたり、汗水流して働くそのの土壤に降りたつことができた人もいる。そしてそれは、ふるさとに埋もれるようなよろこびとなるのだった。<sup>57</sup>

## おわりに

森崎は先述の「からゆきさんが抱いた世界」の中で、からゆきさんに「いたましげに寄り添いつつ、自らの生活態度をくずそうとはしない市民

<sup>55</sup> 同上、108頁

<sup>56</sup> 前掲書『からゆきさん』216頁

<sup>57</sup> 同上、213-214頁

的なまなざし」を断じながら、「私たちはからゆきさんに対応するとき、近代化自体への批判と対決をこめないかぎり、猟奇性の枠を超えない」としていた。それは、からゆきさんが「日本の近代化のひずみそのもの」の存在だからだという<sup>58</sup>。

一章で指摘したように、からゆきさんをはじめ流民を取り巻いていたのは戦前戦中と戦後を架橋し、日本の近代以降に通底する資本と国家が一体となった人を移動させる限りない暴力であった。そして、この暴力とは近代の不可避的な付随物などではなく、近代の本質そのものであっただろう。森崎が見出したからゆきさんの「幻想」の「力」とはこのことを告発するものであり、同時にそれは、近代とその暴力が戦後の現代に至るまで私たちの認識や思考の枠組みに深く影響しつづけてきたことを明らかにするものでもあった。

そして、流民であるからゆきさんは近代化に翻弄されながら、近代のそれとも、また前近代のそれとも異なる共同性を独自に、同じ流民やアジアの「異族」とともに培おうとしていた。森崎を通して思想化されたかの女子たちの「幻想」が指し示していたのは、人が「故郷」を離れても「ふるさと」と繋がりえること、そのなかでもはや「故郷」ならびに祖国は絶対的なものではなく、「ふるさと」はつくられえるものであるということだった。

そして、『からゆきさん』を読むときに問われているのは、こうしたからゆきさんの「幻想」の「力」と思想の意味を取り逃がしてきた私たち読み手の側であった。それは読み手の現在と読み手が拠って立つ基盤とはなにかを鋭く照射するテキストとして、常に現前しているのである。

---

<sup>58</sup> 前掲「からゆきさんが抱いた世界」118-119頁